

平成30年9月4日(火)

老球の細道435号

モチベーションの源泉を知る

会津バスケットボール協会 室井 富仁

旧ユーゴスラビアのセルビアは人口たった700万人しかいないが、バスケットボールは世界の強国でリオ五輪ではアメリカと決勝を戦い銀メダルに輝いている。セルビアがなぜ強いかを知るために、あるレポーターがセルビア大使館を訪ねた。色々な質問の中で、「コーチはどのようにして選手のモチベーションを高めていますか？」というのがあった。答えは下記の通りである。

「セルビアでは選手がたくさんいるし、チームの競争も激しいから、そもそもモチベーションが高くないとチームでは生き残れない。モチベーションがあるのが大前提。そういう事情があるから、コーチがわざわざ選手のモチベーションを高めようとする必要はない。いい選手でもやる気がなかったら生き残れないし、逆にがんばれば生き残れる道はある」

日本では夢のような話である。日本のアマチュアコーチの最大の悩みは、選手のやる気をどのように高めるかである。この課題はミニバスケットから大人ルまで共通する永遠のテーマである。やる気のない選手、チームには、どんなにすばらしい指導しても馬の耳に念仏、泣く孫に爺の説教。やる気のある選手に囲まれたコーチは世界の幸福者である。しかし、悩みながらも優れたコーチは選手をやる気にさせることができる。そして勝つ。

モチベーションとは、人にある行動をとらせる動機や刺激である。勝ちたいと思い、それに対するモチベーションをもっている選手は、コーチやチームメートに対する信頼感も持っている。また、このような選手は吸収できることはすべて吸収しようと、学ぶことに関して前向きである。チーム練習の前後にも自分のスキルを磨くために個人練習をし、チームのことを考え、チームワークを大事にするという特徴がある。そして、過去の実績がなくとも、高校からメキメキ上達する。

コーチは、選手がモチベーションを掻き立てられるものは何なのかを知っておかなければならない。「これが私を意欲的にしてくれるものだ」と選手から言ってくるわけではないので、コーチが選手から引き出さなくてはならない。

アメリカでは選手のモチベーションの源を知るために次のような試みをしている。

*表彰の挨拶：優れた競技成績を評価されて学校や地域社会で表彰されると想定し、その時の壇上での挨拶を各自に書かせる。自分が表彰される内容をすべて書き出す。この情報で選手の目標とするものがわかる。

*チームとしての表彰の挨拶：チームが表彰される理由を各自に書かせる。これによってチームの目標が明確になる。コーチの目標とチームのそれとの差がわかる。

*目標とする選手：選手が目標とする選手を3人あげさせる。少なくとも1人は現役選手。名前と一緒にその理由も書かせる。

選手のモチベーションの源泉を知ることができれば、少なくともやる気にさせる初めの1歩は踏み出せる。コーチが燃えることにみならず、選手に火をつけなければチームは動かない。選手一人一人のモチベーションにチームの成功と勝利がかかっている。

「プレイヤーの外枠しか見えていないコーチに価値はない。プレイヤーと一体になれるコーチこそ勝利に導く力を持っている」(ビンス・ロンバルディ)